

萩原恭次郎 最初期詩篇論

— 作中に現れる〈空〉〈神〉と〈処女〉〈太陽〉について —

平居 謙

抄 録

萩原恭次郎研究の現状における問題は、初期作品研究が非常に少ないことである。私は以前に「萩原恭次郎におけるキリスト」という論文を発表したが、本稿ではそれとは別の観点から、恭次郎初期詩篇における「上位存在」追及。同稿で至りついた結論へのさらに強い証明を行おうと試みている。作中に現れる〈空〉〈神〉と〈処女〉〈太陽〉といったキーワードを頼りに初期詩篇群を分析した。

0 はじめに

詩の全く新しい世界を切り拓き大正末期の詩壇を震撼させた詩人・萩原恭次郎（1898—1938）は群馬県勢多郡、現在の前橋市に生まれている。日本未来派の詩人・平戸廉吉に出会い初期の静かな詩風が急速に過激化。23歳で上京後岡本潤・壺井繁治らとダダ雑誌「赤と黒」を創刊した。25歳で前衛芸術集団マヴォに参加。それら時期の集大成として大正一四年に刊行した詩集『死刑宣告』は詩壇の注目するところとなり、日本近代詩史の転換点¹ともなった。次いで思想色の濃い詩集『断片』を出版。二八年故郷の前橋に戻る。クロボトキンの研究に専念。農民の生活を題材とした土着的作品を発表。没後すぐに「セルパン」に載った「亜細亜に巨人あり」は、特に元同志的アナキストたちから多くの反発を招き研究史においても言及の集中するところとなっている。国家に抵抗し、自我を貫く強烈なイメージの詩人が、いわば侵略戦争に加担したかのような作品を書いたのだからその謎が議論を呼ぶのは至極当然ともいえるし他にも「彼方」「北支方面」など問題視される作品が散見する。

しかし恭次郎が「それぞれの創作時期に何を絶対者・超越者と考えていたか」²という視角で彼の全作品を読み進めてゆくとき、私にはさして異和は感じられない。むしろ萩原恭次郎その人のあり方として極めて自然な流れであったようにも思われるのである。晩年の「亜細亜に巨人あり」前後詩篇における所謂「転向」も、必ずしも時局に阿たものではなく恭次郎自身からにじみ出てきたものである可能性は大きい。本稿では萩原恭次郎の最初期詩群全作品を五つの時期に分類し、そのそれぞれの時期にみられる「上位存在」について考察する。

1 萩原恭次郎の詩的出発

萩原恭次郎は土の匂いのする、極めて静かな詩から出発をした。例えば静地社版全集第二巻「初期作品篇」所収の15歳の頃の作品「三国峠の旅の人」は「三国峠の旅の人／白いシャッポを横チョに冠り／馬の背に吹く秋風に／エンヤトラトンと行きやんす」と民謡調でさえあり、17歳で発表された「秋の日」も「なみだのダンス／秋の陽の青きにじみ／そして赤きためらひ／赤チョッキの／侏儒ひとりゆく／舟つける岸に／またちった／ぺんぺんぐさの悲しみ」というような具合で、素朴な感触がある。後に驚異のダダイストとなって詩壇を席捲するとは思われない牧歌調の作品であるといえる。

「萩原恭次郎における《キリスト》の問題」（『キリスト教文藝』第12号）で恭次郎初期詩篇における「キリスト」について考察した1995年3月においては、初期作品に注目した論考は皆無で、ほぼ手探りの状態の中でそれを書いた。その2年後に発表された沢崎将満「萩原恭次郎の〈処女〉詩篇」³

の序に次のようにある。

そこで本稿では、いままでほとんど焦点の当たらなかった初期抒情詩時代の詩篇、特に「梢にかかり眠るもの」とその周辺の、大正八年四月から同九年四月までのキリスト教信仰詩篇、及びその後大正10年1月までに制作された詩篇を熟考することで、新たな恭次郎観の構築を試みたい。私自身はといえば、萩原恭次郎を扱う方法⁴について考えるところがあり、その間求めに応じて何編かの『死刑宣告』に関わる文章は書いたものの10年近く意識的に研究という場所を離れていた。今回恭次郎研究を再開するに当たり、当時より随分と進展した研究状況を調査して初めて沢崎の論考も目にしたのであった。お互いに影響することなく書かれた拙稿とこの論考はしかし、非常に似た切り込み口から恭次郎の初期詩篇に迫ろうとしている。このことは、初期詩篇におけるキリストの問題を再度、もう少し広い視野で探ろうという気持ちを私に与えた。前傾論文においては、厳密性を持たせるために、「キリスト」にまつわる語に限定したのだが、本稿では「キリスト」をも含めて、恭次郎における「上位存在」を探ろうと考えた。ここでいう「上位存在」に関しては徐々に考察の中で明らかにしてゆくが、主体の行動原理となるべき存在、主体に命ずる存在のことで、一般的には神・主義・信条などを指し示すだろう。また、物理的には「高い位置」がその象徴として使われることも多く、小高い丘・山頂・空・塔の頂などを例に出すことが出来る。本稿では以下 ①空のイメージと対概念としての「地」―②女神―③〈処女〉詩篇の意味に分けて、恭次郎最初期詩篇における「上位存在」について考察する。

2 「空」のイメージと対概念としての「地」

さて、静かで素朴な詩を書いていた初期の恭次郎にとっての「上位存在」は、結論からいうと非常に明確で「空」「天」「夜の空」「神」「女神」「太陽」「春」「キリスト」等がそれに相当する。もちろんそれらの語が現れても特別な思い入れが感じられないことも一般には多く、該当の語があるからといって「上位存在」を認識するというわけではない。だが、次のような例に触れる時「空」への思い入れの異常な熱さを読者は知ることになる。「明るい麦穂」は大正11年7月「炬火」に発表された。

序詩

都にゆきたし 都にゆきたし／都に住まはん 都に住まはん／都こそ限りなき文明の泉
都こそ限りなき官能の灯／都こそ至上至細の官能の灯り／叡智の明り

その十五

美しくあれ 心いたむまで／心とどまらず 日々を歩む／いずこにありとて耐えられず
都の空のみこひしたふ／東京の空 友 雑音／息もくるしく絶ゆごとく
ふかくしづみし 瞳はいたむ

執拗に繰り返されるみやこ・都・東京への思い。その上で、「東京の空のみこひしたふ」というフレーズが現れるとき、みやこ・都・東京は本当は空の代替品に過ぎないのであって、恭次郎が求めているのは空そのものに過ぎないのではないかとさえ思われてくる。そのように感じてもう一度読み返してみると、今度はふと読み飛ばしてしまっていた次のようなフレーズに出会う。

その四

汽車の線路をあゆみゆく／われつかれかなしみ線路をゆく／このはて「都はある！」
われ道のべにほほけしたんぼふみ／ごうと すぎゆく車を仰ぐ／
この汽車にのる人 みな天国のごとし (後略…)

都にゆくために汽車に乗ってゆく人のことを「天国のようだ」と感じる。この感じ方はすなわち、都に住むことも天国であるという発想につながる。そうするとき、「東京の空のみこひしたふ」という表現の意味はより思い入れの深いものとして受け取られるのである⁵。「その二十一」にあらわれる

「高き高きところあゆみゆく人あり」という表現も同様に、「空」が単に風景を超えて、それ以上の重みを担う語であることが分かる。

この「都にゆきたし」という思いはちょうど同じ頃書かれたであろう「閉ぢよ」という作品に、そっくり裏返しの形で現れる。東京へ行きたい、という思いと、それを雑念としてシャットアウトしようという強固な意志とがぶつかって、静かではあるが葛藤の強烈さを感じさせるものである。先走って言えば、後の強烈な詩集『死刑宣告』においては、この蓄積された情念がどっと外部に開放されたかのような趣がある。さて、「閉ぢよ」を以下に引用する。

若々しい梢の葉は地の動脈の響きをきけり。／天のふくらみを知れり。

真青にくるめきては空に笑へり。／わが窓しめよ。

外は如何になやましき。形ある雑音をたたながために……。

一つの心をとぢよ。再び汝にきたる。芽生えまでは。／外は早みぐるしき狂いなり。

全集年譜大正七年の項には「上京して文学に進むことを熱望したが、一人暮らしの養母を思い煩悶が続く」とある。もう一度先に引いた「明るい麦穂」のフレーズに沿って言えば「としよりすてて都に出でむか／われ出でなば」としより死なむ」という葛藤である。それが作品「閉ぢよ」では、「雑音」を遮って望みを閉じるべし、と自分に命ずる、あるいは今咲き出そうとする望みの蕾に命じる。そしてその望み＝蕾もまた、「天のふくらみ」と、高い位置を表す空と関わらせて表現させているのである。その他にも「夜の蛙」「夏の夜と犬」⁶「愁夜哀曲」⁷などには共通する「夜の空」のイメージが存在する。「夜の蛙」の冒頭を以下に引く。

うす月の夜の深さもめぐれり。／あざやかな強きにほひの春の夜心

しめやかにうす青きもやの重たさに／ひとしほ月は力なく

ほのかにもわが肌になやましき足ぶみす。

夜の空のイメージがはじめに提示される。明らかに〈東京〉や〈都〉の空や〈天のふくらみ〉の希望に満ちた空とは異なっているように思われる。「うす青きもやの重たさ」「ひとしほ月は力なく」といった詩句が夜の空の持つイメージを否が上にも高めてゆく。そしてそこにタイトルにあるように「蛙」の声が聞こえてくるのである。「ころ……ころ、ころ……ころ、ころ、ころ」と行が進むにしたがって視覚的にも増加する蛙声。もっとも、視覚的效果といっても後の『死刑宣告』のそれに及ぶべくもないが、最初期においても素朴な形ではあるが、視覚性が見て取れることは注目しておいてもよいことだろう。というのは、先にも述べたように『死刑宣告』は恭次郎の初期詩篇の要素が急激に増殖して噴出したものに他ならないことの確認にもなるからである。横道に逸れた。詩では、蛙声が夜の空に沢山響きだすころ、はじめて主体である「われ」が立ち現れてくる。

われ立ちてひとり思へば／心はいや冴えきはまり

二つ啼き三つ啼き無数の声は啼きとまなく／大きく小さく夜にをどり

心とらへていかに遠く近くひびき止まなく。（最終部）

今、「明らかに希望に満ちた空とは別」と述べたばかりであるが、逆に考えれば、〈夜の空〉と限定されていない先の二篇も詩のトーン自体は決して明るいわけではなく、一人自分だけがそこにいることを実感させられるという作品になっている。「明るい麦穂」も結局は「閉ぢよ」や「夜の蛙」と同じようにぼつねんと自分の心と向かい合うしかない心境へと最終的には向かうのである。この意味においては〈夜の空〉詩篇と同じ位相にあるといえる。恭次郎のこの時期の作品においては、明暗を問わず天や空を強く意識した主体のありようを見て取ることが出来る。

3 対概念としての「地」

ここで補足的ではあるが、「空」「天」に対する一般的な対概念である「地」に関するイメージを

色濃くする作品について触れておこう。引用中の○印は全集記載そのまま載せた⁸。

爛熟

末梢神経の疲れにひたひた藍色の／入染み、しめつた夜のゆらめきは夏の夜のだらけさ、
身体に芽をふかす、悩ましき、熱、肌の匂ひ、異臭—。
黄色く爛れた駅のほひの様な月／横たわつた丘の上に泡だち、吐息し。
みにくきはふくれし地面のさびしさ、
生物は生煮えの卵黄の冷き愁と、官能の激しきひとときなり、
熟れし果実のなやみに似て

……中略……

張りのなり麻痺した夏の爛熟せし○慾、そのの木も、そのの石もそのの川も
ああ、みんな きころしてやりたい心、／小娘○○をひねつてやりたいじれつたさ、
その乳房に○○○○きころされたいほのめき、／薄にがき重い、くさい夏の気分
私の身体全体のただれた花が一杯に咲きみちてゐる。／咲きこぼれてゐる。

非常に陰鬱なイメージで始まるこの作品は、引用文前半の詩句「熟れし果実のなやみ」、またはこの作品のタイトルそのものに集約されるだろう。鬱屈した、しかし抑えることの出来ない願望、官能。

これらのものが入り混じって、腐敗に限りなく近い「爛熟」の状態に現在ある。この詩が発表されたのは大正6年11月の「秀才文壇」であるが、その前年、恭次郎は萩原朔太郎の下に出入りを始めていた。また周知の通り、6年2月には朔太郎の詩集『月に吠える』が刊行されている。恭次郎が朔太郎の諸篇の影響を受けていたことは明らかで、冒頭の「末梢神経」というようなイメージは、朔太郎を彷彿とさせる。引用に省略した部分にも「黒地の如き夏の夜、不倫の女、私生児、神経病者、犬、猫、刃物、ピストル、瓦斯の匂ひ、生々しき夜の流れ、をどり」など、朔太郎の詩篇から抜いてきたような語も見受けられ、影響というよりも模倣とさえ見える。

しかし、決定的に『月に吠える』と異なっているのは「地」と「天」とのバランスの問題である。私はかつて『異界の冒険者たち』⁹の中で朔太郎の『月に吠える』に関して〈天と地のイメージが融合するもの〉と分析した。しかし、恭次郎の初期詩篇には、右に挙げたような「地」をイメージさせる作品は少ない。大正7年の1月には「土臭き抱擁に」という作品を発表するが、これも、「現実の土」であって、憧れに手が届かないことからくる憂鬱・絶望・恐怖といったイメージを担う「地」という形ではない。これらの感覚が強く表出されることになるのは、皮肉なことに憧れの都会へと移り住んで以降に刊行される詩集『死刑宣告』においてこそであった。恭次郎の最初期詩篇においては、憂鬱・絶望を強く示す詩篇は、例外的に本作品「熟れし果実のなやみ」に見られるものであって、その他のものは、手を空に伸ばし、空への憧れを描いている。

4 〈女神〉登場

「上位存在」として「空」「天」「夜の空」といった語が現れてくる萩原恭次郎の初期詩篇にやや変化が見えるのは大正6年11月に発表された「収穫の歓喜」¹⁰からである。そこにはそれまでの「空」に混じって「神」という語が現れてくる。この後も完全に「空」が消える訳ではないが、より明確な「神」という「上位存在」の印象の方が強まってゆく。そして詩の中に〈女神〉が登場する。

七月の晩

本草の根がかすかにふるへた晩／そこを流れる川のべに／小さいみみずが銀の音を振つた／
ささやかな流れに／月がまるく崩れ／おのおのの葉はひとつづつにほやかに動き
蛙の音が快く響きをたててゐる／／ほんとに陰鬱なほど静かな晩だ
ほんとに柔い魂の若やぐ晩だ／人間の身体が女神の様に匂ふ晩だ （前半部）

この詩がほんとうに、恭次郎自身が恋人との交わりを下敷にして書かれたかどうかといったことは問題ではないだろう。現に詩の後半部を見ると「私」は「この晩たまたまに恋人が欲し」く「可愛い素足を露草の中に立たせた」いと願い「細い指で一寸頬にさはつて貰ひたかつた」と続く。それほどに「想像のすごい晩」であり「恋人を想像の手まりとして愛し抱き上げたい晩」だと書くのだ。何のことはない、妄想の世界なのである（と読者を騙すこともできる）。この詩で問題なのは、恭次郎が、詩中の「私」の恋人に対して「女神の様に匂ふ」という言い方をしているというところだ。そしてこの表現が恭次郎の最初期詩篇における「上位存在」を最も典型的に表す言葉の一つであるというところだ。実は、〈女神〉という表現自体は頻出することはない。しかし、今述べたように〈神〉は多くの場合、何らかの〈女性美〉と密接に絡まりあいながら描かれてゆく。引用は全て部分。

・夢と詩きり知らない乙女の／孕んだみにくさに邂逅時／なんと云ふ人間の自分自身までのみにくさに／思ひ及ぶだらうか／その処女に神は一体なんと云ふ目を／向けるのだらう

（「処女の美に嘆く」）

・若草の様な心臓の上に／二つ光つた木の実の様な乳房／恋人よ。お前は神の様だ。（「乳房」）

・純真な恋人よ／栄光の恵みを把持せる恋人よ／じつとやさしきそのひとみよ／お前は何を思つてゐる／お前は何を思ふふけつてゐる／神のやうに思はれるお前よ！ （「若くさ萌ゆ」）

・処女の唇、われらの唇、またそこにならびて／唇と唇とふれつつ、ふるへつつ／ああ イエスよ！ イエス！／みな空に向ひ、身をのばすー。（「降誕祭と処女と私」）

このように挙げてゆくと、恭次郎が女性を呼ぶとき〈神〉と看做すという一つの図式が浮かび上がる。女性に対して「神様のようだ」と賛美することは、若い男性がそうすることを考える時、それほど唐突な印象はない。また、例えば若い女性の健康美に対する、純真さに対する、或いは弱さに対する賞賛と切なさなどが入り混じった感情を理解することはそれほど難しいことではない。

5 〈処女〉詩篇の意味

さてここで冒頭に紹介した沢崎将満の論考「萩原恭次郎の〈処女〉詩篇」について再度触れてみたい。彼はその中で、恭次郎の初期詩篇の中に〈処女〉の語が頻出することに注目し、「ここにおいて〈処女〉の語は、単に女性への敬称ではなく、自らの信仰の有り様、信仰の象徴として用いられている。」「これらの〈処女〉詩篇の性格を一言で言うならば、それはキリスト教信仰という〈観念〉に救いを求める志向、と言えるだろう。」と述べている。そして沢崎がもっとも「信仰詩」として評価するのが引用最後に載せた「降誕祭と処女と私」で、同作品に対する沢崎の評価は次のような言葉として現れている。

この絶望的な状況の中で恐怖する恭次郎を救うのは、やはり〈処女〉、つまり信仰であった。それは棄てようとして棄てられなかったものである。第三連「私は思想にもつかれた、情緒にも／そして一人の処女さへ棄てようとしてゐる」と対比して、第四連「ああどうして思想がいらう、情緒がいらう、」と全てを諦めつつ、しかし「処女がいらう」とは続いている。〈処女〉による救済だけは諦めきれないののである。棄てようとして棄てられなかった〈処女〉を、そしてそれによる〈救済〉を生きるための唯一の拠所として、恭次郎は優れた信仰詩を残している。その中でも大正九年一月発表の「降誕祭と処女と私」は、イエスを信じることに至上の喜びと官能を得るという詩である。（第二章最終部）

引用中で「第三連、第四連」といっているのは彼が直前に批評している「梢にかかり眠るもの」の部分のことであるが、右の文章を読むと、ほとんど絶賛に近い言葉を「降誕祭と処女と私」に与えていることが分かる。

しかし私は、この作品に対して全く別の見方をしている。「降誕祭と処女と私」は、作品としては

面白いが〈信仰詩〉というべきものではなく、寧ろ正反対に〈反信仰〉への兆しであると感じるのである。それは、〈信仰〉と〈性欲〉という相反するものの並列に根拠がある。

ああイエスの房々たる髪毛、瞳、血ながれし胸を慕ひ／ゆれてくる高い胸の上に
十字架はあつく熱し食ひ入る／酔へる如くまどかに唄はれつづく
処女たちの繊麗なる肉声に洗はれゆく心／また男ら私達までつつましく心そろへ
処女の如くふるへ、処女の如くうたふ／うたはるる讃美歌につつまれ
美しき熱情にあやどられ寄りそふ／

ああ、神の御手のやうに、うら若き柔さ！ きよらかさ！

抱く手、吸はるる唇、しづまらざる興奮、押しつけし額／かをりゆく、高くただよひゆく――

ああ！／身をなぜる感触！ 天国の感触！／神の御座は近し！（ああ抱き抱かれつつ）

右に引用したのは、中半から後半部に賭けての部分であるが、それにつづいて前節最後に引用した部分が最終部分として置かれている。念のために再度書き写しておこう。

処女の唇、われらの唇、またそこにならびて／唇と唇とふれつつ、ふるへつつ

ああ イエスよ！ イエス！／みな空に向ひ、身をのばす――

「処女の唇」と「われらの唇」が「そこにならびて」存在することは現実にはありえるだろう。クリスマスの祝祭の、人ごみの中で歌われる賛美歌。楽しい歌声と幸せなひと時。しかし、「唇と唇とふれつつ」「ふるへつつ」という表現が現れるとき、異常な異和を覚えざるをえない。それは即座に「ああ イエスよ！ イエス！」という詩句が続くことから、「われ」の視線はやはりイエスに向かっているのだ、というところに直ぐにすりかえられてしまうが、どのように考えても妖し過ぎる。自分の上唇と下唇とを合わせて歌声を発することの表現かと読み直してみるが、どうも腑に落ちない。一行前の「処女の唇、われらの唇」の並列がどうしても男女の接吻をイメージさせてしまう。もし、この時期の恭次郎にそのような表現が一切ないとすれば、この読みは「少々色を付け過ぎた読み」ということになるかもしれないが、「美しくかすんだ微笑の身にせまる宵／ほんのり桃色がかかった空気は／まるで生きたあたたかい／女の匂ひのやうだ。」（「花の咲いた夜」冒頭）「処女たちの肌は、自然と青み出でて／たとへなき心の動きは、／ほたるのやうに、／うすやみにもはつきりと、／美しさと幻をもてうかみ、／さみしい異性の心に波うってくる。」（「蛭と処女」部分）など、青い性欲の迸りにも似た表現が頻出することを考えると、この詩も処女の唇とわれ（ら）の唇の合体と受け取れ、この詩の主題は信仰ではなく、寧ろ「自身の欲望の表出」ということに近づく。

それでは、「イエス！ イエス！」と信仰告白しているかの表現の意味が問題になるが、これは少し前の詩句「神の御座は近し！（ああ抱き抱かれつつ）」に大きく関わってゆく。拙稿「萩原恭次郎における《キリスト》の問題」の中で述べたように、例えば「地によぐれ這ふもの」の中に「イエスのやうに佇む」という表現が出てくる。これは、一見、イエスに倣う信仰深い態度であるかのようにも見えるが、その「私」は詩の中ほどで、「イエス像を投げ」る者でもある。実は、「イエスのやうに」という表現は「イエスの玉座を奪う」とも受け取れるのだ。この詩においても全く同様に、「身をなぜる感触！ 天国の感触！／神の御座は近し！」が「神の玉座を奪う」とも読めるのである。このように、自我の過激な主張のあり方は先にある『死刑宣告』への助走と考えることが出来、沢崎将満の〈熱心な信仰詩〉という読みに関しては正面から受け取りすぎではないかとの疑念を強く持たざるを得ないのである。沢崎は三節最後で「地によぐれ這ふもの」等には恭次郎次特有の、生活に疲れた者の虚無的雰囲気濃厚である。この問題は重視すべきであるが、ここでは残念ながら措くこととする。」と書いているが、まさにキリスト教について考える上で最も重要な作品を彼は「措いた」訳である。

6 おわりに

本稿では萩原恭次郎の最初期詩篇に現れた「上位存在」について考察した。最初期においては〈天〉〈空〉続いて〈神〉が現れてくること、またその〈神〉は多くの場合〈女性美〉への賛美とともに現れ、最終的には『死刑宣告』へとつながる自我の拡大傾向のプロセスとしてとらえ得える事を示した。本稿に続いて詩集『死刑宣告』『断片』そして詩集未収録の「もうろくずきん以降作品」に見られる「上位存在」を明らかにしその上で恭次郎の文芸構造との有機的関連性を明らかにする時初めて詩人・萩原恭次郎の正統な評価が確定しえるのだと考えている。

註

1 日本近代詩史の転換点

『死刑宣告』は同時代詩人にも熱狂を以て迎えられ、死後70年を経た現在恭次郎に関する評価は日本現代文学研究において非常に高まりつつある。本稿と並行して書かれた拙稿「萩原恭次郎研究の現状と課題」（京都教育大学国文学会誌）において恭次郎受容及び研究の現状と方向性を詳述しているのでそれを参照されたい。

2 本稿では恭次郎の初期作品中に現れる「絶対者・超越者」的イメージを探ってゆくが論を進める中では「上位存在」という用語を用いたい。先回りして触れてると、第1節において明らかにするように単に宗教的意味での「神」「キリスト」というものだけではなく、人間の「上」に存在するという意味で「空」「天」なども考察の対象に含めるからである。

3 文学論藻 東洋大学文学部国語国文研究室 1997年刊

4 拙稿『『死刑宣告』読解における読者の態度』1997年『キリスト教文藝』第13号
キリスト教文学会関西支部

5 詩「明るい麦穂」にはその他にも「しずかなる 五月の空に／わがさかづきは血もてもらう」
「夕日の空に狂いゐる」「みどりの空にすがりつく」（その二）「瞳あげて何を見るや／青々と 空はさつきながれて／目にみどりさみしさのみ」「ひとみ 空に上げども 見る何物もなし」（その五）などの表現が見られる。特に「その二」の「夕日の空に狂いゐる」は、本稿の少し先で触れる〈夜の空〉との中間項として注目すべき表現である。

6 「夏の夜と犬」（部分）

夜中のふらりとした空／梢のたましひのさびしさが／えべつに息づいている月に……(略)……
吠えたつてゐる犬の目と……(略)……その先に夏の愁がかすかにしみてゐた。

7 「愁夜哀曲」（最終部）

夜の吐息のごと愁心の影のゆらげば／ほのめける本草の芽にもしみて／かすかな霊のふるへは／麗人の長きいだきを思ひ長き接吻にかわく。

8 引用中の○印

全集記載のままの引用。「爛熟」は大正6年9月「秀才文壇」に発表されたものである。全集校訂には「爛熟せし○慾」「小娘○○」は原文不明、「その乳房に○○○○きころされたい」の原文には「乳房にのほめき」とあり文意不明、と記されている。

9 拙著『異界の冒険者たち』1992年 朝文社刊

同書の中では萩原朔太郎詩集『月に吠える』における天地融合とそれによる異界出現について詳述している。そこでは天のイメージを現す作品と地を強調する作品が交互に現れ、さらにはその間に一篇の中において天地が融合する作品を朔太郎が配置していることを指摘している。

10 「収獲の歓喜」が発表されたのは大正6年11月の「秀才文壇」であるが、1月後の12月に上毛新聞に載った

恭次郎の「愛の詩集について室生氏に」にも、それまでエッセイの中に使われていなかった〈神〉〈聖母マリア〉というような語彙が見られる。大正6年の年譜には生活上の重大事件の類は記載されていないが、「6月『秀才文壇』に長詩「夜の蛙」が掲載される。(川路柳虹推薦)」「次第に短歌をはなれ詩作に専念する。」「このころ奈良雅枝との恋愛 はじまる。」とある。このいずれかの事柄が〈神〉関連語彙の登場に関わるのかは決定的な決め手は存在しない。しかし、これ以降本文で提示するように、「女性」「女性美」に関わる形で〈神〉が詩中に使われることは明らかで、年譜最後の項目「奈良雅枝との恋愛」が何らかの形で影響していると考えることが出来る。なお、「奈良雅枝との恋愛」に関しては「風 文学紀要 vol.4」(2000年3月 群馬県立土屋文明記念文学館刊)所収の石山幸弘「萩原恭次郎とその時代(一)」に言及がある。

A Study of the Initial Works of Hagiwara Kyojiro

— 〈empty〉 〈god〉 〈virgin〉 〈sun〉 —

Ken HIRAI

The problem in the study of Hagiwara Kyojiro is that the initial work research is scant. I have written the thesis “Christ in Hagiwara Kyojiro” before. In this text, I will write about other points. I will analyze “Absolute existence” in his initial works. I pay attention to key words. such as 〈empty〉〈god〉〈virgin〉 and 〈sun〉. As a result, the poet’s important essence was able to be discovered.